

「テシマウ」の文法化と現在の使用傾向、学習者の誤用から見る教育への一提案

ミシガン大学
花井善朗

1. はじめに

日本語の文末表現「テシマウ」は、完了を表すアスペクト表現であると同時に、話者の主観的な感情や評価を表す表現でもある。この意味特性は、数多くの先行研究において議論されているが、それらを見ると、アスペクト形式としての意味を中心に据えた分析（松下（1928）、高橋（1969）、吉川（1973）、寺村（1984）、金子（1995）など）と、話者の感情・評価的な意味をその中心的な意味と捉えた分析（藤井（1992）、倉持（2000）など）とが存在することがわかる。このような多義性には、本動詞「シマウ」から「テシマウ」への文法化が深く関わっていると考えられ、先行研究でもOno（1992）やStrauss & Sohn（1998）で、その文法化の過程が議論されている。本研究の第一の目的は、この文法化により、「テシマウ」がアスペクト表現から話者の感情・評価的な側面を意味することになるという意味的拡張を、記述的なアプローチにより採取されたデータによって裏付けることにある。

日本語教育においては、「テシマウ」は初級文法として扱われており、文型自体は単純であると言えるが、それにもかかわらず、学習者にとっては比較的使用しにくい表現の一つになっているように感じられる。本研究の第二の目的は、この使いにくさの原因を、上記の文法化に加えて、現代日本語で書かれた小説や社説に見られる「テシマウ」の現在の使用傾向、学習者の作文に見られる「テシマウ」の誤用という三つの観点からの記述的な分析を通して議論し、教育現場への有意義な提案をすることを目指すことにある。

2. 調査方法・被験者

文法化に関しては、文法化が起こったと考えられる近世に書かれた27の文献から、「テシマウ」の実例を取り出し分析した。また、現代日本語での使用傾向を調査するためのデータとしては、小説と新聞の社説からの例を使用した。使用文献の選択においては、なるべく様々なジャンルの文献からデータを収集することを心がけた。現代語のデータを小説と社説という異なったジャンルから集めた理由は、主に小説が物語を語る、社説が意見を述べるという、異なった役割を目的としているからである。また、同様の理由により、近世のデータの採取においても、当時書かれた大衆の文学作品や歌舞伎の台本、洒落本、人情本など種々多様な文献を調査した。

学習者の作文に見られる誤用を調査するためのデータは、米国の大学における授業という環境の中で日本語を525時間以上学習した学生、または、それと同等かそれ以上の日本語能力を有する学生9人に、映画のストーリーとそこから見出されるテーマを書かせ、更に自分の意見も書かせた。作文の長さについて教師からの指示はなく、一番長い作文で文字数が2550、一番短いもので1107、9人の平均は1653文字であった。

3. 結果

3.1. 近世における「シマウ」の「テシマウ」への文法化

近世における「テシマウ」の文法化をデータから観察した結果、近世が進むにつれて、完了の意味合いを持つ「テシマウ」の割合が減り、事態の発生を強調する用法が増えていくということが分かった。また、この「発生の強調」を表す用法が、話者の感情や評価を表す用法に結びついていると考えられる。この両用法の使用割合の変化は、動詞が内容語から機能語へと変化し、元の内容語としての意味が希薄になっていくという文法化においてよく見られる現象と一致している。ただし、完了の用法と「発生の強調」の用法の使用の割合を比較した場合に完了の用法の割合が減っていると言っても、それが完了の意味合いを持つ「テシマウ」の使用が減少しているということを意味するわけではない。それよりも「テシマウ」の使用数自体が近世において増加し、「発生の強調」を表す用法の使用が増えた結果として、このような割合の変化が現れたと考えるべきである。つまり「テシマウ」は、近世において、完了を表す用法を保持する一方、「発生の強調」を表すことで使用の幅が広まり、使用頻度も大幅に増加したと言えるわけである。

3.2. 現代日本語における「テシマウ」の使用傾向

現代語においては、完了の意味合いを持たない「テシマウ」の用法の割合が更に増加する。例えば、『砂の女』の中の「テシマウ」の実例を調べてみると、『砂の女』には、合計438回「テシマウ」が使われているが、その中の最初の110例中、完了の意味合いが読み取れるのは、六つの例のみである。また、朝日新聞の社説61記事中の86例の「テシマウ」について、完了の意味合いがあるかどうかを調べてみると、完了の意味合いが感じられる用法は見当たらない。このことから、現代日本語においては、完了を表す「テシマウ」の使用頻度は大変少ないということがわかる。

3.3. 学習者の作文に見られる「テシマウ」の誤用

2. で述べたような中上級レベルの学習者に最もよく見られる誤用は、「テシマウ」使用時の誤用ではなく、非用の誤用であるということがわかった。非用の誤用を厳密に認定するのは難しいが、本研究では、学習者は「テシマウ」を使用しなかったが、日本語母語話者であれば大半が「テシマウ」を使用したであろうと考えられる場合を非用の誤用として扱った。その結果、映画の中の登場人物にとって都合が悪い、または否定的な感情を生むような場面の叙述において、学習者が「テシマウ」を使用しなかった場合の非用が、日本語母語話者にとって最も誤用と受け取られやすいということがわかった。

4. 考察

本研究で分かったこととして、次のようなことが挙げられる。まず、「シマウ」の「テシマウ」への文法化に関しては、アスペクト表現として完了を表す「テシマウ」から「発生の強調」を表す「テシマウ」への意味的拡張が見られた。また、日本語教育においては、「テシマウ」の意味・機能として、完了を表す用法と、話者の感情・評価的な側面を表す用法の両用法が「テシマウ」の用法として取り上げられることが多いが、これはこの文法化が影響していると考えられる。しかし、小説や新聞の社説をデータとして、現代語における「テシマウ」の使用傾向について調査してみると、完了の意味を表すために使われているとは考えられない「テシマウ」の使用が圧倒的な数を占めているということがわかった。使用傾向にこのような差があるにもかかわらず、教育現場において完了を表す用法をそうでない用法と並列的に教えることには、疑問が残ると言わざるを得ない。「テシマウ」には完了を表す用法と「発生の強調」を表す用法があるが、現代日本語では「発生の強調」を表す用法が圧倒的に多く使われるということ、教師はおさえておく必要があるであろう。そして、実際に文法を導入する際にも、「発生の強調」の用法を中心に教えるのが適当だと考えられる。

参考文献

- 金子亨 (1995) 『言語の時間表現』、ひつじ書房
倉持保男 (2000) 「補助動詞「(～テ)シマウ」について」、山田進・菊地康人・初山洋介 (編) 『日本語 意味と文法の風景—国広哲弥教授古稀記念論文集』、289-300、ひつじ書房
高橋太郎 (1969) 「すがたともくろみ」、金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』、117-153、麦書房
寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味』第Ⅱ巻、くろしお出版
藤井由美 (1992) 「「してしまう」の意味」、言語学研究会 (編) 『ことばの科学5』、17-40、むぎ書房
松下大三郎 (1928) 『改撰標準日本文法』、紀元社
吉川武時 (1976) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」、金田一春彦 (編) 『日本語動詞のアスペクト』、155-327、麦書房
Ono, T. (1992) *The Grammaticization of the Japanese Verbs oku and shimau*. In *Cognitive Linguistics*. Vol. 3. 367-390.
Strauss, S. and S. Sohn (2001) *Grammaticalization, Aspect, and Emotion: The Case of Japanese -te shimau and Korean -a/e pelita*. In Silva, D. J. (ed.) *Japanese/Korean Linguistics*. Vol. 8. 217-230. CSLI Publications.

用語リスト

文法化：以前は内容語として使われていた語がある文法を表すための構成要素の一部なり、機能語として働くようになる現象。